

# 2017年度 第33回（最終回）

## 在日アジア人留学生への研究補助



## 受給生紹介

東京・三田の慶應義塾大学にて

RASA－アジアの農村と連帯する会  
Rural Asia Solidarity Association

氏名 宝音朝格拉 (Bao yin chao ge la)  
出身 中国 (内モンゴル)  
大学 筑波大学  
生命環境科学研究科 博士後期課程 3年



#### (留学目的)

来日した当初は中学校や高校の社会科教育をより深く勉強し、新たな指導方法や研究方法を習得し、帰国後それを生かして内モンゴルのモンゴル族高校で地理教育の仕事に就き、生徒たちに尊敬されるような先生になるという夢を持っていました。しかし、乾燥・半乾燥地域である内モンゴル自治区の農地の展開や気候変動などによる、黄砂の発生や沙漠化という環境の悪化が日々増す一方である。私は帰国するたびに故郷の環境悪化を目にし、心を痛めていた。そして、修士修了後、どうしても故郷の環境保護に力になれるような人になりたいと思い専門を水文科学に変更しました。乾燥・半乾燥地域である内モンゴル自治区では現在地下水による灌漑農業が多く展開されており、アメリカのオガララ帯水層の枯渇と同じような地下水の過剰利用問題が懸念されています。しかし、内モンゴルでは水文学的な研究などがあまりにも行われてなく、地下水灌漑農業をどこまで展開してよいかは明確にされていません。

#### (研究課題) 霞ヶ浦沿岸水田と霞ヶ浦水収支

地球上の水資源の分布のばらつきが大きい。その中で日本は比較的水に恵まれていると言われているが、日本の国土の勾配が大きいため、降った雨がすぐに流出してしまうから水資源として豊富とは言えない。また、人口の密度などにより日本の国内においても一人当たりの水資源の分布が均一ではない。北海道や東北などが比較的多く、関東は少ない。そのため茨城県の霞ヶ浦は関東の重要な水資源となっている。霞ヶ浦は1960年代から人口の増加や経済活動の進展により、水質汚染が起り、水質保全や水資源開発の基礎として霞ヶ浦の水収支が1981年に初めて総合的に評価された。その後も流域の土地利用や水利など変化があり、流域環境は変化した。2004年と2014年に霞ヶ浦の水収支の研究があったが、沿岸水田の用排水量など不明確な部分が多い。したがって、霞ヶ浦の水収支が精度よく求められているとは言えない。また霞ヶ浦沿岸には稲やハス田が多く分布しており、水田からの排水が霞ヶ浦の水質を大きく影響していると指摘されている。

本研究ではまず統計資料・GISデータや現地調査などにより霞ヶ浦流域の水田の灌漑方式の分類を行い、渦相関法による水田実測蒸発散量1点データとFAO基準蒸発量1点データから水田実蒸発散量のFAO係数を求めた。そして気象庁アメダス観測地点FAO基準蒸発量と求められたFAO係数を用いて水田の面の蒸発散量を推定した。それから蒸発量+浸透量+排水量=降雨量+灌漑量という水田の水収支を生育ステージごとに推定した。また推定結果は排水量の実測結果や実測による先行研究の結果を用いて検証した。

また霞ヶ浦水収支の中の湖面蒸発量は湖心の渦相関法による湖面実測蒸発散量をパルク式とクリギング法によって湖面全体に適用した。7大河川の流入量と河川流出量は実測値を使用した。中小河川の流入量は流域降雨量と流出率から推定した。湖水の水道水取水量や工業取水量は実測値を使用した。地下水の流入流出量に関しては、2008年の沿岸地下水の実測による先行研究の結果を引用することにした。湖水貯留量変化に関しては国土交通省の河川の水位観測データを使用した。上記データや方法を用いて2003から2012の霞ヶ浦水収支をより精度良く求め、水田の霞ヶ浦の水収支に与える影響を検討する。

霞ヶ浦の水収支を精度よく求めることによって、霞ヶ浦の水質管理、新たな水資源開発と洪水予防などの分野において正確な基礎情報を提供できると考えられる。

また、今回の研究を通じて、基礎知識から研究方法まで習得できれば、修了後は内モンゴル自治区へ帰り、乾燥地域の地下灌漑農業と水資源の関係について調査や研究をしたいと思っています。

氏名 林 芬妙  
出身 台湾  
大学 花園大学  
文学研究科博士課程一回生  
仏教学専攻



### (留学目的)

私は将来において、専門研究者となることを志しています。仏教、禅に関わる幅広い研究領域を様々な角度から発展的に学んで行きたいと思います。日本へ留学した目的としては、今後、日本臨済宗の専門道場での禅の修行と、花園大学での仏教、禅学の研究、「行学一体」釣り合って、社会に貢献し、利他の精神の発揚にもつなげて行きたいと思います。

日本、中国、台湾の有効と文化交流を促進するため、坐禅会、学術討論会の相互開催などの活動を展開することを希望しています。世界人類の平和福祉を祈願致します。

### (研究課題)

私は現在「契嵩の禅思想をめぐる考察」をテーマとして研究しています。契嵩は北宋時代の儒仏一致論者としての評価のみが目立つが、彼自身は言うまでもなく、神鼎洪諲や洞山曉聡に参じ、雲門宗の法系を継いだ禅僧です。契嵩の禅思想と儒教思想はどのような関係性があるか、その著述である『壇経賛』、『伝法正宗記』、『伝法定祖図』、『鐔津文集』など中心として、他の文献調査も多方面に展開し考察したいです。

(1)まず、契嵩と関連人物の伝記を考察します。契嵩の禅思想を解明するために、この時期の禅僧たちの思想との関係と、契嵩以前における雲門宗の法系の文献調査を中心とします。

(2)また、契嵩の著述を考察します。『壇経賛』は慧能の伝記と語録『六祖壇経』の心要を記載されている。『壇経賛』は『壇経』の重要な禅法は「定慧為本」「一行三昧」「無念為宗」「無相戒」「無相懺」などを解釈し賛誦します。『壇経賛』を通して、儒教の窮理尽性と禅宗の見性成仏とがその本質に於いて契合するという根本理念を考察します。

この二つの調査によって、儒禅の融合調和の視点から、契嵩の禅思想を改めて考察します。

氏名 Saha Soma Rani  
出身 バングラデシュ  
大学 神戸大学大学院  
農学部 研究生



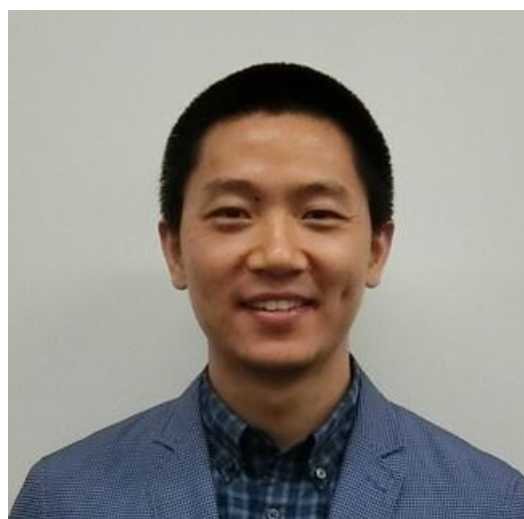
**(留学目的: Aims to come to study in Japan)**

Bangladesh is a promising developing country with its rapid growing poultry production and slow growing other animal production especially bovine production. However, the reproductive technology used for the increase bovine production is merely the crossbreeding of the cattle. For the crossbreeding, good bulls are selected mainly based on their physical appearance without the examination of their reproductive performance. Similarly, in the procedure of artificial insemination, frozen-stored spermatozoa are usually used without the examination of their fertilizing ability. The consequence of this unconsciousness is responsible for a greater reproductive failure of cattle that ultimately reduces the bovine production, which is further responsible for the growth retardation of Bangladeshi children. In order to resolve this problem, it is necessary to bring exact knowledge of Reproductive Biology and advanced Biotechnology of bovine production to my country. The aims to stay in Japan are to obtain advanced knowledge of sperm molecular biology and to learn methodology of the examination of sperm molecules which are involved in the expression of sperm fertilizing ability.

**(研究課題: Topics to study at present)**

The term “capacitation” means a series of physiological and biochemical changes of spermatozoa during the expression of fertilizing ability in female reproductive tracts. Capacitation allow spermatozoa to exhibit hyperactivation and undergo the acrosome reaction and these are indispensable for the successful fertilization with eggs. Reproductive Biology laboratory of Kobe University focuses on intracellular signal transduction that is related to the sperm capacitation, hyperactivation, acrosome reaction, and fertilization with eggs in the domestic animals. In this laboratory, I am studying intracellular regulatory systems of the expression of sperm fertilization, especially roles of ATP-dependent sodium-potassium exchanger ( $\text{Na}^+/\text{K}^+$ -ATPase) and  $\text{K}_{\text{Sper}}$  (a pH sensitive  $\text{K}^+$  current) in the capacitation, hyperactivation and acrosome reaction of bull spermatozoa. Moreover, I would like to extend the possible results of the above-mentioned basic research to the development of novel methods for the exact assessment of fertilizing ability of frozen-stored spermatozoa which are produced for the usage in the artificial insemination.

氏名 王 文強  
出身 中国  
大学 日本大学  
芸術学研究科 2年  
舞台芸術専攻



(留学目的)

私は子供の頃から中国伝統芸能を学んでいましたが、大学のために能や歌舞伎などの日本の伝統芸能について学ぶ機会があり、中国と日本の伝統芸能は深く関係していることを知り、興味を持ちました。“中国伝統劇と日本歌舞伎の比較研究”を通じて日本伝統芸能の発展や芸術形式、審美観念、表現方法等の内容を学び、中国の伝統劇に応用する可能性や、双方の劇の持続的発展について研究し、価値ある伝統芸能を後世に継承していきたいと思っています。

(研究課題)

私は現在『中国黄梅劇に歌舞伎の義太夫狂言の手法を応用する可能性  
～音楽と演者の相関性について～』研究しております。

本研究は、母国中国の伝統的な舞台芸術の一つであり、歌舞伎と同様に近世（日本は江戸時代、中国は清朝）の時代に発展していき、現在までも伝承されている安徽省の地方劇「黄梅劇」と、日本を代表する伝統的な舞台芸術「歌舞伎」を、「歴史」「戯曲」「身体（表現・型）」などを中心に、比較研究しながら、「黄梅劇」にはない歌舞伎における「義太夫狂言」の手法を取り入れ、その手法を効果的に応用する可能性があるかどうかについて研究した試論である。

氏名 黄 恭  
出身 中国  
大学 早稲田大学大学院  
環境・エネルギー研究科 修士1年



#### (留学目的)

私にとっては、大学時代に環境分野への興味を持ち始めたことが出発点であり、仕事を通して中国の環境課題の厳しさを目の当たりにして、自分にできることを考え始めた。母親になってから、環境改善への意識や子孫に良い環境を残したい等の思いがより一層強くなるとともに、幼児期から子供へ環境教育を始めることの重要性を痛感している。しかし、中国民衆は環境基本知識が足りないし、体験活動も少なく、自ら学習する積極性も乏しいので、学校などでの教育だけでは環境教育の効果は不十分である。これらの現状分析を踏まえて中国の環境教育の効果を上げるために、まず、環境教育の先進国を手本として学ぶことが必要だと私は考えている。本分野の先進国といえば、欧米各国都日本が該当する。その中で欧米国と比べて、日本の環境教育は体験型の教育を重視し、地域社会の中で各地域の資源を生かして活動するとの特色を持っている。本特色により、民衆が環境教育活動に参加する可能性や利便性が向上させられると思われる。さらに、日本の教育には地域興しに関する技術や理論・方法論も含まれているから、経済発展と環境課題への取り組みの過程で得た知見もよい手本になるだろう。さらに最も重要な点は、日本と中国は同じアジア文化圏にいるため、歴史・儒学・仏教の影響で「家族関係」が最も重要な社会的関係となっており、家庭の影響力が学校、社会や企業などよりもっと広くて深いと考えられる。これらを含めて考慮した上、日本の環境教育のやり方を研究するとともに、家庭の影響力を利用し、子供だけではなく、家族全体に環境教育への関心を高めさせ、環境教育活動に積極的に参加させていくと私は考えている。

#### (研究課題)

世界の食料の三分の一にあたる約 13 億トンが毎年捨てられている。先進国では、消費に近い段階で多く捨てられている。まだ食べられるのに捨てられてしまうのは食品ロスと言われている。食品ロスに対して、食品だけではなく、その生産に使われた土地、水、エネルギー等の貴重な資源も無駄になる。日本では、食品ロスは約 632 万トン／年であり、その内、家庭系の食品ロスは約 302 万トンである。事業系の食品ロスの削減に対し、政策や規定などを通じて対策を講じている。一方、家庭系の食品ロスの削減に政策と規定は用いにくい部分があり、主に学校と連携して給食教育活動を行っている。給食教育活動はほとんど「食べきり」に関して、家庭系食品ロスの主な出どころの他の二つである「過剰除去」と「直接廃棄」はほぼ対応していなかった。さらに、学校で行われている教育活動は幅広く影響できるが、家庭系食品ロス削減の教育対象として、学生のみである、家庭全員が含まれていない。したがって、研究目標としては、家庭系の食品ロス削減効果を向上させるためには、現在、小学校で行われている食品ロス削減教育活動におけるメリットとデメリットを分析し、家庭向けの食品ロス削減教育プロジェクトを提案することが挙げられる。

氏名 Takizawa Patcharapim  
出身 タイ  
大学 筑波大学  
人間総合科学研究科



(留学目的: Aims to come to study in Japan)

I decided to study in the Doctoral Program in Human Care Sciences at Tsukuba University. This program can give me a lot of knowledge about public health system and experience in high quality medical research of a developed country. My short-term goal is that, while I am here, I will collect as much knowledge as possible, especially the knowledge about Japan public health system, which is considered excellent and fully developed. It can be seen that Japanese people's average lifespan is very long, compared to Thai people. I believe that it is a result of good public health system. Aside from collecting knowledge about Japan public health system, I would also like to learn a proper approach of doing research, both in and out of my program. This is because Tsukuba city is a city of good and high-quality researches.

As for my long-term goal, after completing this program, I would like to return to Thailand to improve Thailand public health system. I will look for an institution where I can work as a researcher, a medical doctor, and a teacher at the same time.

(研究課題: Topics to study at present)

**Association between duration of untreated psychosis and remission including factors associated with the duration of untreated psychosis in first-episode schizophrenia, Thailand: Cohort Study**

Aim of study is to explore the association between the time before go to treatment (Duration of untreated psychosis) and the rate of recovery including the factors that be barrier of health service accessibility, especially stigmatization in schizophrenic patients.

氏名 Lini Ocvenety  
出身 インドネシア  
大学 神戸大学大学院  
国際協力研究科 研究生



**(留学目的: Aim to come to study in Japan)**

Indonesia is one of countries that located in the ring of fire and its situation gave us various disasters, from natural hazards (earthquake, tsunami, volcano eruption) and manmade disaster (rainforest fire and smoke pollution). As a developing country which citizen is struggling to earn money for everyday living, most of them cannot build a decent house with good design and correct structure. With these social and physical vulnerabilities, even if small hazard hit some Indonesia's area, the effect becomes very destructive and gives significant damage to both private and public infrastructure.

I decided to study in Japan as this country also experienced natural and manmade disaster heavily and so far had implemented advanced disaster mitigation system than other Asian countries. Especially in Kobe which accustomed to the Great Hanshin-Awaji Earthquake at 1995 that made a notable movement in their housing reconstruction project. Not only Kobe, other disasters had many housing reconstruction projects which can be learned. Japan is an ideal place to research and connect with other countries as well.

**(研究課題: Topic to study)**

My research theme in research course is “*Post Decade Evaluation of Java Earthquake 2006 Housing Recovery: The Sustainability of Core and Dome House Projects in Yogyakarta*”.

After a disaster occurred, government and society (both international and national) tend to give help in all aspects, especially living place. While permanent residence for victims was not always given in high priority at the starts but later government, academics and NGO will start to think variable of housing reconstruction plan and then the donors were start to merge and reconstruct the housing plan for affected society. The review of each housing reconstruction project frequently published in a report approximately at some 2 point events, right after disaster (6 months) and right after house completion (2-3 years). But there is short list of reports mention the real situation of housing reconstruction projects after decade disaster passed. The real housing project accomplishment can be seen if the users had living inside the project for an elongate time and the actual condition now might give the different images and sincere needs.

This research project will explore the decade effect to the existing Java Earthquake 2006 Housing Projects in Yogyakarta area. The central theme of research is doing evaluation which finding relation between certain types of housing design with sustainability variables such as, abandonment activities, building material that being used now, seismic safety, expanding or renovating progress, and user knowledge improvement around the area.



氏名 李 智慧 (イ ジへ)  
出身 韓国  
大学 東京大学  
教育学研究科博士課程 1 年



### (留学目的)

塾講師をしていた頃、抑うつである子どもに出会ったことを切っ掛けで、心を病んでいる子どもたちの心理状態に興味を持った私は、臨床心理士を夢見て日本留学を決めました。最初から博士までの進学を考えていたことから、臨床心理学や精神医学という分野では文化圏が完全に異なる欧米より、同じ文化圏である日本での研究が将来的に有利であると思ったことが最も大きな理由であり、今も日本留学に満足しております。

### (研究課題)

修士論文では、養育者の過保護的な態度（主に父親）にフォーカスを当てることにし、「韓国人大学生が認知する親の過保護的な養育態度に関する研究」を行いました。研究Ⅰでは質的なデータを用いて①親の過保護行動及びプロセス②親の性別による差を検討し、研究Ⅱで、父親の過保護行動尺度を開発しました。これらの研究結果を今年に心理学関連のジャーナルに掲載することを目標としています。

氏名 周 驍遠  
出身 中国  
大学 立教大学大学院  
ビジネスデザイン研究科  
博士課程 1年



### (留学目的)

同揚光電（江蘇）有限公司で7年間にわたって人的資源管理の業務に従事しながら、夜間の大学に通って工商管理科目を勉強した。しかし、専門知識の修得に物足りなさを感じた。特に、トヨタの「ものづくりはひとづくり」という人材育成の必要性を強調する考え方に共感したことから、日本への留学を決意した。日本にはヒトを大切にする企業が多く、研究の蓄積も豊富である。留学している期間内に、多くの事例や研究に触れ、人材育成の必要性を強調する考え方について探求したい。

### (研究課題)

在中国の外資系企業の多くは管理社員として現地の人材を登用しない。業務面においてもコスト面においても効率が悪いだけでなく、現地社員のモチベーションの低下や離職率の上昇にもつながると指摘されている。では、なぜ外資系企業は現地社員を管理職として積極的に登用しないのだろうか。現地人材は派遣者にとって代わるほどのレベルに達していないのだろうか。以上の問題意識の下、外資系企業における現地人材の育成に関する研究を行う。

氏名 Kurbonova Gulnoza  
出身 ウズベキスタン  
大学 明治大学大学院  
文学研究科博士3年



### (留学目的)

留学する前から、サマルカンド外国語大学の日本語学科で日本語の教師として働いていました。日本語以外の日本の文学や文化、歴史を教えられる現地の先生がいません。母国では、教師の育成が以前から大きな課題になっています。私は、母国の大学で、日本語のみならず、日本の文学なども教えたいという思いをいただいています。

『源氏物語』をはじめ、日本の古典文学について教えたいという思いと、『源氏物語』をはじめとして、多くの日本の文学作品をウズベク語に翻訳したいという目標の実現のために留学をして、今、研究をすすめています。もちろん、一人のウズベキスタンの女性として、日本の大学で博士号を取りたいという夢もあり、今、博士号取得を目指しています。

### (研究課題)

『源氏物語』を中心に、日本の文学作品を研究して、ウズベク語に翻訳するための土台をつくることが第一の研究課題です。私は、『源氏物語』における女性の教育方法や教養の問題、女性のあり方、そして、主人公光源氏の女性観について興味をもっており、そのような問題を視野に入れて、今、研究をすすめています。

博士課程在学中に、「桐壺」巻のウズベク語訳を完成させることも、もう一つの研究の課題です。